

論文審査結果の要旨

論文提出者	(氏名) 江頭留依
論文審査委員	主査 埴岡隆 印
	副査 廣藤卓雄 印
	副査 大星博明 印
論文題目	Low Tongue Strength and the Number of Teeth Present Are Associated with Cognitive Decline in Older Japanese Dental Outpatients: A Cross-Sectional Study
<p>(論文審査結果の要旨)</p> <p>本論文は、病院歯科外来でメンテナンス治療を継続している高齢者を対象として、口腔機能の低下と認知機能の低下の関係性を調べた横断研究論文である。</p> <p>あらかじめパワーアナリシスにより対象者数を想定し 50 人が研究対象となった。認知機能は日本語版のモントリオール認知評価 (MoCA-J) の質問を用いてスコア化し、認知機能低下を定義した。被験者の属性を調整変数として用い、説明変数として、口腔の状況は、歯周組織検査、咬合支持、現在歯数等を用い、口腔機能として、舌圧、咀嚼能力、嚥下能力等の客観的評価法が用いられた。あらかじめ、2 変量での関係を把握し、ロジスティック回帰モデルに適切な変数を投入して、独立した関係性を検出した。その結果、年齢、残存歯数、舌圧、咀嚼能力は、認知機能の低下と関係していた。ロジスティック回帰分析により、認知機能低下は、高い年齢 (OR:1.25; 95% CI:1.03-1.52; p=0.024)、少ない現在歯数 (OR:0.83; 95%CI:0.76-1.00; p=0.047)、低い舌圧 (OR:0.87; 95%CI:0.77-0.98; p=0.022) と関連していた。この結果に関して、内的妥当性および外的妥当性について詳細に議論が重ねられ、歯科外来における早期の認知障害の検出が提案された。</p> <p>我が国は超高齢社会に突入しており認知症対策は重要で喫緊の公衆衛生課題である。したがって、本論文は歯科外来で、患者に認知症の傾向がみられた場合、早期の介入の第一歩が歯科からも図れ、さらに、歯科を通じて国民の認知機能へのさらなる意識醸成への展望に繋がる大変意義のある研究成果を示した論文であると考えられる。また、研究の背景や結果、研究の限界を十分に考察し、今後の研究の方向性や展開等、論点を明確にしている点も高く評価される。よって、本論文は博士 (歯学) 学位論文として価値あるものと認めた。</p> <p>論文提出者は、公開発表会の場での審査員からの質問に対しても、その後のレポートでの回答や個別の質疑応答で適切な回答が得られたと判断した。</p>	